慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	吉岡金市著 森近運平：大逆事件の最もいたましい犠牲者の思想と行動
Sub Title	Morichika Umpei : thought and behaviour of the most pathetic victim of the case of high treason, 1961, by Kin-ichi Yoshioka
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.5 (1961. 5) ,p.416(70)- 419(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19610501-0070
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610501-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

吉岡金市著『森近運平——大逆事件の最もいたましい犠牲者の思想と行動』

飯田鼎

「実に世に類なき裁判であった。判決を知った時、御身は狂せんばかりに嘆き悲しんだであろう、真に思いやられる。それも無理はない、僕は死の宣告によって道徳的義務の荷を卸して安楽な眠に入るのだが、御身と菊とは之が為めに生涯の苦痛を受けねばならぬのである。御身は今迄僕の為に苦労ばかりして呉れたのに、僕は少しも報いることをえず、弱い女に、幼児を背負わして永久の眠りに就かねばならぬ。アヽ胸のさける思いがする、愛する我妻よ、人間の寿命は測るべからざるものだ。蜂に刺されたり、狂犬に咬まれたりして死ぬ人もある。不運と思うて諦めてくれ。事件の真相は後世の歴史家が明らかにしてくれる。何卒心を平にして徐ろに後事を図って呉れよ。僕も男一匹だ。茲に至って徒らに慟哭するものでは無い。」

これは、明治四十四年、いわゆる大逆事件の犠牲者森近運平が、処刑される直前の一月二〇日、その妻、繁にあてた手紙の一節である。「事件の真相は後世の歴史家が明らかにしてくれる」と信じて死んでいった森近運平が、この事件にはまったく関係がなく、従って大逆事件そのものが、いわば国家権力による一大陰謀事件であったことは、今日すでに多くの研究者によって明らかにされている。問題は、大逆事件が、たんに五〇年前の過ぎ去った悪夢ではなく、これと同じように残虐で暗黒な陰謀が、今もなお跡を絶たずわれわれを脅かしているという事実である。松川事件をはじめ、八海事件菅生事件などは、われわれの記憶に新しいところである。

だがこの大逆事件ほど陰惨で残酷で、天皇制国家権力の醜い反面を暴露したものはなかった。事件の経過や本質などについては、すでに絲屋寿雄、塩田庄兵衛、田中惣五郎、神崎清、渡辺順三の諸氏によるくわしい研究や史料的な検討が熱心につづけられたが、しかしともすれば、この事件が、幸徳事件ともよばれているように、当時の社会主義運動の理論的な指導者としての幸徳秋水の名声におおわれて、その他の犠牲者の社会主義運動における役割が不当に低く評価されがちであったことは事実であろう。筆者は、大逆事件の犠牲者のうちで、幸徳を除いてもっとも興味ある人物として、和歌山県新宮町の医師大石誠之助、「入獄記念・無政府共産」というパンフレットを印刷して全国の同志に配布し、事件の発端をつくった宮下太吉に大きな影響をあたえ、革命僧と呼ばれた箱根太平台、林泉寺の住職、内山愚童、明治十年代、自由民権運動を指導し、革命的な思想を抱きながら、のちに日本のラスプーチンと称された恩田の行者、飯野吉三郎にちかづき、幸徳等を売ったといわれた謎の人物奥宮健之、そしていまひとり森近運平に注目していた。これらの人々の行跡については、いままであまり注目されなかったし、また注目されたにしても、きわめて簡単にふれられているにすぎない。

この意味において、この度、吉岡金市博士によって、森近運平にかんするきわめて詳細にして有意義な研究がはじめて公けにされたことは、まことに喜ばしい。吉岡氏は、森近運平と同郷であり、森近の伝記をまとめようと決心されたのが、大正一一年であったというのであるから、吉岡氏がこの問題について、いかに長い間苦心されたかを推測することができるのである。著者は、これについて、本書の序文においてつぎのようにのべておられる。

「戦後の天皇制権力の崩壊と共に、むしろ中央で、ぞくぞく大逆事件に関する具体的な資料が公にされはじめたが、残念ながら、森近運平に関するものは、彼が大逆事件関係者のうちで最もすぐれた思想家であり、科学者であり、技術者であるにもかかわらず、『その他』おおぜいのうちの一人として、附随的に取扱われる程度を出でなかったのである。」すなわち著者は、大逆事件の通説的な解釈にたいする鋭い批判を問題意識の底に秘めつつ、本書を書かれたわけであり、そのためにまた、いままでに現われた大逆事件にかんする研究が、「幸徳とそれにつらなる人々」という叙述の仕方であったのに反し、むしろ理論的には幸徳の影響をうけつつもこれを批判し、彼よりも科学的社会主義の堂奥に近づいていた点を指摘されているのは、今後大逆事件の研究に志す者にとって耳を傾けるべき忠告となるであろう。

本書は、つぎの諸章からなっている。序—本書のなりたち、一、大逆事件の歴史的意義、二、大逆事件と森近運平、三、森近運平の生いたち、四、森近運平の人と事業、五、森近運平の社会主義、六、森近運平の農業理論、七、森近運平刑死の前後、八、森近運平は生きている、附録、森近運平獄中書簡、跋—森近運平と筆者との因縁。

著者は森近の社会主義について、つぎのようにのべている。「森近運平の社会主義は、ヒューマニズムの基礎の上に、当時の社会科学の理論で武装されたものであった」（一六八頁）。そしてさらに、「森近は当時の無政府主義者にあり勝ちだった生活の乱れを、最も強く戒めた一人である。自ら清らかな生活を、夫婦・友人・同志の間で実践すると同時に、社会主義の発展のために、その清らかな人道を説きつづけたのである」（一七九頁）と主張されているように、「社会主義理論とヒューマニズムとの統一」（一七五頁）として把握されていることは興味深い。

本書を読んで、著者がもっとも力をいれたと思われるところは、第四章、第五章および第六章であると思われる。すなわち明治四〇年、大阪平民新聞が、東京において、弾圧のため廃刊された週刊平民新聞に代って発刊されるや、その指導的人物として活躍した経緯

については、とくに第五章にくわしく書かれているが、本書を読んでとくに心をうたれるのは、森近が、当時の他の社会主義者とちがって、農民の子であったという事実である。心には労働者や農民にたいする熱い同情が燃えていたにしても、ほんとうに働く者の苦しさを知ることのできるのは、やはりそうした環境から生れ出でた者でなければならない。この意味において、彼が農民であったことは、その思想形成に決定的な影響をあたえたにちがいない。著者もこの点をとくに注目されて、従来の研究においてまったく空白ともいうべき協同組合運動にたいする彼の貢献、とりわけ岡山県における産業組合運動において彼の果した役割を重視されているのは卓見というべきであろう（二二〇頁以下参照）。

明治社会主義運動史の研究に手を初めたばかりの筆者が、約半世紀もの間、森近に私淑され、その研究に精根を傾けられた著者にたいして、以下のような妄評を書きつらねるのは、まことに無躾であり、御海容のほどお願い申上げるほかはない。まず読後感をのべさせていただくならば、森近はたしかに、その書簡集などからもうかがわれるように、実に人間味豊かな温かい性格の持主であったという点は、誰しも異論のないところであろう。しかし今日彼を評価する場合に、少なくとも「郷土の偉人」というような叙述の仕方には、若干問題があるのではなかろうか。また著者はしばしば森近が、大逆事件をひきおこすに至った宮下・管野らの行動とは、まったく無関係であったことを強調されているのはもちろん正しい。しかしそれにもかかわらず彼が首謀者のひとりとして絞殺されたのは、彼の思想が、天皇制絶対主義を科学的に分析し批判した正しい歴史観に立脚するものであったという事実によるものであることは、筆者も指摘されているが、そうした森近の思想を貫ぬく革命的な性格や科学的な思考方法というような積極的な面よりは、森近は「大逆事件にはまったく関係がなかった」といういわば消極的な面の評価の方が本書には目立っているように思われる点である。そしてすでにのべたように、本書を読んで、少し物足りなく思ったことは、森近が従来の大逆事件との関係において不当に低く評価されていることを強調されるに急なあまり、彼の思想がまぬがれえなかった限界――それは実に当時の日本における社会主義運動の理論的水準の低さからくる制約でもあったのだが――、たとえば、科学的社会主義に近づきつつも、無政府主義を完全に克服することができなかった点などについて、ほとんどふれておられないことである。これは、宮下太吉に皇室の本質にかんする正しい階級的な思想をふきこみながら、宮下らの言動にたいし、きびしい批判と警告とをもって臨むことができず、むしろ曖昧な態度をとった（検事調書によれば）という事実と符合する。

われわれは、森近が幸徳とならぶすぐれた理論家であったことは、高く評価しなければならないが、同時に、歴史上の人物としてたんに英雄視することなく、冷静にその理論的限界をも指摘することをおそれてはならない。

なお最後に、本書はミス・プリントが多く、「正誤表」のほかにもかなりのミスが発見される。これは出版社が刊行を急いだためと思われるが、この点は、再版によって改められることを切望するものである（一九六一年一月・日本文教出版株式会社発刊・B6・三六三頁・定価三二〇円）。

――一九六一・三・一二――

『ラブルール』
――一つの存在形態――

渡辺國廣

【始めに】 十六世紀にはいり農民の保有地は減少し、代ってそこに領主の小作地が設定された。そうした事態は『ラブルール』にとって進出のための絶好の機会となった。彼はこれら小作地の経営を引受け、そのことによって大きな実力を備えるにいたった。領主制の変質過程のなかで『ラブルール』は力を増し、村の生活で領主を斥けるほどの存在と化した。彼は真の実力者として村会を組織し、十七世紀には村の生活に君臨するまでになった。

これほどの『ラブルール』ではあるが、その具体像についてはこれまでに十分解明されていない。フランス農業史の研究で十七世紀は長く空白のまま放置されて来た。しかし最近にいたり研究が進み、その一環として『ラブルール』に対する関心が急速に高まるにいたった。しかし概括的な発言が可能なほど個別研究が出揃っているというわけではない。従ってこの段階で『ラブルール』について扱おうと思えば、提示された個別例をめぐって検討を進めるほかないであろう。柴田三千雄氏はその著「フランス絶対王政論」のなかで、グーベル氏の論文によりながらボーヴェーにおける『ラブルール』を分析した。『ラブルール』は小作地の経営引受者として登場し、その過程で領主権を請負うにいたった。しかしこの請負いは彼の農業経営と無関係ではない。『ラブルール』にとって重点は飽くまでも農業経営にあった。これがグーベル氏の描く『ラブルール』像である。バス・エソンヌ地方ではどうか。

【一】 自分の役畜や農具で経営に当っていれば、彼を『ラブルール』という。しかし彼本来の保有地は役畜を充用すべく余りに手狭なものであった。マンヌシの五人の『ラブルール』は平均八アルパンを保有するに過ぎない。『ラブルール』の関心は何よりも土地の賃借に向った。

第一に『ラブルール』は領主の小作地の経営引受者であった。彼はそのことにより『フェルミエ』と呼ばれた。これら小作地が二〇〇アルパンもしくは三〇〇アルパンの規模を有することも稀ではなかった。また『ラブルール』は別の場所に土地や牧草地を賃借していた。これらの賃借を通じて『ラブルール』は経営を拡大していっ